

山茶碗の用途と変化 ～企画展『山茶碗』～

山茶碗は、平安時代終わりごろから戦国時代初めごろにかけての日常雑器です。生産品の大半を占める碗と小皿は主に食器として使われました。日用品として使い勝手のいい器種構成を突き詰めた結果が、碗と小皿のセットだったのでしょう。この碗と小皿は400年という時の中で、食生活の変化にともなってその形を大きく変えていきます。平安時代後期から鎌倉時代中期にかけては主食中心、以降は副食が徐々に増えていったため、主食がたっぷり入る大きな碗と少量の副食・調味料用の小碗という組み合わせから、主食・主菜用の小さな碗と副菜・調味料用の小皿へと変化していったのです。やがて、木製の椀が普及するようになると、碗は小皿よりやや大きくて深い皿のような形になってしまいます。この山茶碗の400年にわたる変化をたどりながら、当時の人々の暮らしに思いをはせるひとときを当館で過ごしてみませんか。



調理と配膳の様子：慕婦繪々詞 巻二より抜粋(国立国会図書館蔵)



美濃窯の山茶碗：400年の歴史

カガクへのトビラ Vol.5

核融合科学研究所 / 総合研究大学院大学 ☎ 0572-2222

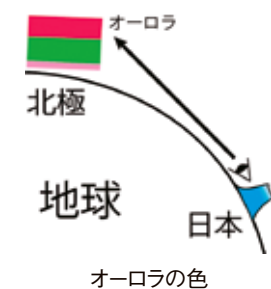
日本で見えるオーロラは赤色!? —オーロラの色不思議—

北欧など緯度の高い地方では、夜空にゆらめく光のカーテン「オーロラ」が見られます。オーロラは日本でも見ることがあります。古くは推古天皇の時代、西暦620年に赤いオーロラが見られたことが『日本書紀』に記されています。1770年には北海道から九州まで広い範囲で赤いオーロラが見られ、尾張藩士の高力種信は「火の雨」のようだとする絵図(右図)を残しています。最近では2004年に北海道で赤いオーロラが観測されています。このように、日本で見られるオーロラは赤く、昔は「赤気」と呼ばれていました。でも、北欧などで見られるオーロラは緑っぽいのに、なぜ日本で見られるオーロラは赤いのでしょうか？



さんこうあんずいけんずえ 猿猴庵随観図繪

オーロラは、太陽から地球にやって来るプラズマ(太陽風)が地球の大気(酸素や窒素)に当たって起きる発光現象です。このプラズマが地磁気に捉えられて北極や南極近くの高緯度地方上空へ流れ込み、高度100kmから500kmの電離圏でオーロラが発生します。オーロラの色は、衝突する原子や分子の種類によって変わります。オーロラの上の方では酸素が赤い光を発して赤くなります。下の方では酸素が緑の光、窒素が赤や青の光を発して、オーロラはこれらの色が混じって緑白色になります。一番下はピンク色です。



それでは、高緯度地方で発生するオーロラは、日本からどのように見えるのでしょうか？地球は丸いため、日本からはオーロラの上の方が見えることとなります(左図)。そのため、日本で見られるオーロラの色は赤いのです。日本の上空でオーロラが発生しているのではないのですね。

